逐鹿者不顧兎

綿引浩一（滔天）
Koichi（Toten）Watahiki

古代中国において鹿は覇者に喩えられた。『史記・淮陰侯伝』に「秦失其鹿、天下共逐之」とあり、「逐鹿」の語は帝位・政権を得ようと争うことを意味する。また、魏徵『述懐』には「中原還逐鹿」とみえ、黄河流域の覇権をめぐって多くの国が興亡してきた史実を物語っている。

さて、掲出の作は『淮南子・説林訓』から摘句したもので、一頭の鹿を競って追いかける猟師たちは、兎のような小物には見向きもしないという意味だが、箴言として捉えるなら、為政者たる者は宜しく下るを為すべし、人民を大切にしなければならない、となるであろう。

作品の選文では句意に触発されることも多いが、特に政治に興味があるのでも覇者に憧れているわけでもない。今回は単に、甲骨文で表現するにはちょうど良い字句だったからに過ぎない。しかし、いざデッサンしてみるとどうもうるさくなり、文字のすわりが悪い。諦めて放り出していたものである。十数年後、後述するある試みによってなんとかまとまった結果が本作である。

「者」――木の枝を器に納めた形で、『甲骨文編』に字例はないが、殷金文にある形なので違和感はない。

「不」――『説文』では鳥の飛天の形としているが、花の萼柎と解されている。字例はそれがひらひらと下に伸びる特徴的な姿である。これを強調する章法も考えられたが、他の字形を活かすため、敢えて簡潔な形に抑えた。

「顧」――殷周期に字例がなく、戦国期以降にみえる文字。「戸」の上に「鳥」形をおいた形が甲骨文にあるので、これに「頁」を加えて作字したが、人足を一般的な跪座の形にするとうるさいので省略形にした。拝む形にみえれば妥当であろうか。

「兎」――耳と尾の形が特徴的な全体象形。足も控えめに愛らしくしてみた。

「逐鹿」――この二字に「塵」形を充て、合文のように一字で処理した。この大胆な試みによって一、二行がしっくりと収まった。以下に詳述する。

「鹿」は全体象形で頭角四足が象徴的に描かれている。表現の目玉とするにはうってつけである。白川静氏によると、殷代では鹿は霊獣と考えられ、神宮の霊囿において飼育されていたという。神人共食の儀に欠かせないものだったのであろう。また「丁卯卜、逐鹿、畢」などと、日時をかえた同文の卜辞が残されている。国事行為として定期的に鹿を捕らえていたようである。

「逐」は『説文』に「追也」と訓し、「从辵从豚省」、「辵」と「豚」の省に从う（従うに同じ）とあり、徐鍇（『説文』の注釈書『説文解字繫傳』を著した）は、「豚走而豕追之会意」と注記している。諸家の説もこれを肯定しており、また、獣を逐うことを「逐」といい、人（軍）を追うことを「追」としている〈白川、白玉峥〉。

『甲骨文編』収録の「逐」字をみると、徐鍇が言うように、多くは「豕」の下に「止」（足跡）を加えて豕追の意を表しているが〔図①〕、そのほか、「犬」らしき獣形に从うもの〔図②〕、豕・犬に从うもの〔図③〕、「鹿」に从うもの〔図④〕、無角の幼鹿「麑」に从うもの〔図⑤〕、「兎」に从うもの〔図⑥〕がある。これらの異体字については、「逐」と同義〈葉玉森、李孝定、徐中舒〉、「塵」は「鹿」の繁文である〈魯實先〉、「𨑓」は奔逸する兎で「逸」である〈唐蘭、白玉峥〉、などの説がある（松丸道雄・高嶋謙一編『甲骨文字字釋綜覧』）。しかし、逐う対象によって書き分けることがあった、と考えるほうが自然であろう。

前述の「逐鹿」の卜辞では「𨑓、鹿」と書かれているものの、「王先狩□鄉畢又逐」とある別の卜辞の「逐」には「塵」形が選ばれている。王自らが赴いて特別な鹿を逐ったのであろうか。いずれにしろ、「塵」形をもって「逐鹿」を象徴できると解釈したい。

以前のデッサンは、個性的な豕・鹿・鳥・兎が主張しあい、さながら騒がしい動物園のようであったが、この試みによってともかく落ち着きを取り戻した。更に、戦国燕璽にある章法に倣い、中央に空間を設け、文字を左右に散らして輪郭を排除。結果、明るく活き活きとした表情となった。今改めて振り返ると、畳点を加えて合文処理すべきだったかとも思う。戦国古璽においては、一般的な「繰り返し」ではなく、合文の章法に畳点が用いられている。しかし

「逐鹿」合文の実例はない。

果たして本作は、篆刻作品として適格か否か、諸賢の批正を仰ぎたい。

甲骨文の字形はプリミティヴな魅力に満ちており、古代人の象徴能力には感嘆せざるをえない。しかし、作品化するには簡潔過ぎて難しい点もある。字説、釈読が確定せず、学者によって見解が分かれている文字も少なくない。様になる字形も限定される。今後、甲骨文に先立つ文字体系が明らかになり、研究が進めば、より自在に変化運用が可能になると期待している。

・印文　逐鹿者不顧兎

・出典　淮南子、説林訓

・印影寸法　縦5.7cm×横5.5cm

・側款　逐鹿者不顧兎。逐字、徐楚金所謂豕追之會意也。甲骨文習見逐字多作　𢓊　形。亦有从（従）鹿形者。此即追鹿之象矣。因以　麀　形當逐鹿二字。覧者為如何。己亥霜降、滔天刻并誌於于養氣齋。

・印材　寿山石　双龍鈕　体高12.2cm

・印泥　上海西泠印社製「潜泉光明硃砂印泥」

〔図①〕

〔図②〕

〔図③〕

〔図④〕

〔図⑤〕

〔図⑥〕

逐鹿者
未願兎
逐字係楚金薇謂
蓋逐之會意也
甲骨文習見逐
字多在麋形
無有从鹿形者
此即追鹿之象矣
因以麋形當逐鹿
二字覺者為如何
己亥霜降滄天刻
并誌于養氣齋